

本学教員執筆書籍の紹介

藤枝憲二・梶野浩樹編集 縦 173 × 横 104mm 518 ページ

小児・新生児診療ゴールデンハンドブック

南江堂 2009年7月25日発行 税込価格 4,725円

梶野浩樹

小児科診療の特徴は、成長・発達する存在である「子ども」、すなわち新生児から思春期年齢までを対象とし、体も心も、また頭の方から足の先まで診る点にある。さらに、病気に悩む子供とそれを取り巻く家族の状況やその背景にある社会情勢・保健福祉制度まで考えなければならない診療科であり、それらに関する幅広い見識を必要とする。日常診療においてそれらの知識を身近に参照・再確認できるものがあれば有用であり、このハンドブックはそのために白衣のポケットにも入るコンパクトなマニュアルとして、小児科医や研修医が小児科の日常診療の座右の書として活用できる本を目指して編集された。旭川医科大学小児科学教室には、内分泌・糖尿病・腎臓、循環器、神経、血液・腫瘍、感染・免疫、新生児という専門グループがあり、それらのスタッフが何度も話し合いを持ち、本書の内容を練り上げた。

本書は第1章「小児科診療へのアプローチ」、第2章「小児科診療の実践」、第3章「新生児科診療の実践」、第4章「小児保健」、そして「付録」から構成される。ポケットサイズでありながら、小児プライマリー

ケアに携わる医師に求められる病態、診断、検査、治療、薬剤の知識が必要十分に網羅されている。全章を通じて、きれいな図表、重要文献、ガイドライン、関連ホームページが適宜示されていて、最後の「付録」では、小児体格指標、検査基準値、各種計算式、医療制度、小児薬用量、輸液組成の記述も充実させた。

新臨床研修医制度の開始とともに、小児科や産科をはじめとする多くの診療科の医師の不足・偏在が明らかになった。一方、医療の専門化・高度化とともに患者側に「いつでも、どこでも、質の高い医療を受けたい」という要望が強くなった。それらの状況変化を受けて、小児科専門医でなくとも患者を十分に満足させる質の高い小児プライマリーケアを提供することが必要になってきた。しかし、現在の小児科の知識は内科全領域に匹敵する膨大さであり、小児プライマリーケアに関わる医師の多くは、その標準的医療がわかりやすく記載されたコンパクトなガイドブックを希求しているに違いない。本書がそれらの医師にとって有用な一冊として愛用されることを願っている。